

バレーでも男女共同参画



男女が一緒に盛り上げられる混合バレー

3人ずつ出場の「混合」人気じわり

男女が3人ずつコートに立つ「混合バレーボール」がじわりと広がっている。男女同数ならでは面白さとともに、生種スポーツにつながる面や、男女共同参画社会と軌を一にする面も。昨年3月には世界大会が千葉県館山市で開催される。

8月1日、川崎市のとろろきアリーナ。NPO法人日本混合バレーボール連盟が主催する全国選手権の東プロック大会が行われ、社会人や学生たちによる16チームが集った。

背の高い男性がスパイクを打つ攻撃がスタンダードだが、相手チームの女性が拾う場面も。長身女性が男性のブロックを覆るシーンもある。

通常の6人制同様ローテーションがあり、男女は交互に配置。前衛は「男2女1」「男1女2」と常に変わる。「男女が交互に、強のある戦術を考案することが混合スポーツの真の楽しさです」と語るのは、同連盟の大江理恵。

身長(19)。他競技でも男女が技を交える種目は卓球やバドミントン、テニスの混合ダブルスくらいで、それほど多くはない。

営業マンの大江理恵が日本混合バレーボール協会を設立したのは2005年。かつて、東京都の高校のバレー部員だった。最後の大会を終え、地元で男女で楽しむチームを作ったものの、参加できる大会も少なく、自然消滅。

「混合バレーがあれば、もっと充実した青春だった」という思いからだった。

男女の身体能力差を考慮し、ジャンプサーブやバックアタックは禁止。けがを防ぐため、ボールは表面がスポンジ素材で20センチ。ラリーが続きやすいよう、ドリブルやホールディングの判定はゆるめ。安全面からオーバernetトやタッチネットは厳格にとる。

普及を始めると、生種スポーツの面から税付きやすいことにも気づいた。「男女別のチームは結構、出席、育児で長続きしにくい。男女が集めればチーム寿命が延びやすい」。東プロック大会予選にあたる地域大会は2チームが参

長続きする生涯スポーツ ■ 幅広い戦略魅力

加、同連盟が開く全国大会、地方大会を合わせた延べ参加チームは、17年度は192大会で約1400にのぼる。

大江理恵は「男女が平等参画する社会作りにも貢献する」と考える。

東プロック大会に出ている「O・N・F」は、横浜林大と日大のバレーサークル出身が中心。代表の大塚将司さん(前)は「セオリーがない領域が多く、色々な戦略が試せる。女子のVリーグ出身者との対戦機会があるのもいい」と語る。

長野市の「JFD」は、同市内の高校バレー部員つながりであった。出席を控えて監督に専念する北沢玲奈さん(24)は「うちは女子もスパイクを打ち、男子も拾う。そういう平等の楽しさに意味があった。それで負けても楽しい」。

国際的にも広がる。4年前、大江理恵の元にロシアから突然、一通のメールが届いた。ロシアでも混合バレーがあり、大会に来ませんか。同じ筋線は外国でも生まれていたのだ。各国に働きかけたロシアで3度、世界大会が開かれたが、実は、ロシアのルールは男性4人、女性2人。昨年3月は男女同数を重視する日本のルールが採用される初の世界大会となり、20カ国以上の参加が見込まれている。(編集委員 中小橋恵)